「福島大学学生教育支援基金」2019 年度成果報告

福島大学学生教育支援基金は、地域の再生復興を見据えながら、グローバル化が進展する社会で活躍できる「強い人材」の育成を目指し、学生が存分に勉学に励み、国際性を育み、社会的実践力を身につけることができるような教育環境を整備することを目的とし、学生支援や国際交流、学生教育環境整備事業等を支援します。2019 年度は、同基金による支援事業として、留学補助等の４事業を採択しました。本紙では、事業の内容をご案内するとともに、その成果をご報告いたします。ご寄附いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

学生教育支援基金支援事業「福島大学と海外協定校による双方向交流事業」

国際交流センターでは、本基金を利用し、学生のグローバル意識啓発及びグローバル人材育成を目的とした海外協定校への学生派遣プログラム及び海外協定校からの留学生受入プログラムの企画・実施を行いました。

派遣事業においては、11 ヶ国・19 大学に 27 名の学生を交換留学生として派遣しました。主な交換留学の派遣先は、サンフランシスコ州立大学（米国）、グラスゴー大学（英国）、ハンザ UAS フローニンゲン大学（オランダ）、カーロリ・ガーシュパル・カルビン派大学（ハンガリー）、培材大学校（韓国）、華東師範大学（中国）、中東工科大学（トルコ）などです。派遣者は、語学の学習はもとより、各々の専門に沿った授業の履修や、派遣先大学の日本文化関連授業での福島について発表などにも積極的に取り組みました。また、短期派遣プログラムでは、オーストラリア・クイーンズランド大学短期語学（英語）研修（10 名派遣）、カナダ・ウィニペグ大学短期語学（英語）研修（7 名派遣）、アメリカ・コロラド州立大学派遣事業（6 名派遣）、台湾・国立台北大学・文藻外国語大学研修（13 名派遣）などへ学生を派遣しました。短期派遣研修参加者の中には、次の目標として、半年や１年の交換留学に挑戦するケースも見られました。

受入事業において、2019 年度の海外協定校からの交換留学生は、10 ヶ国 49 名となりました。交換留学経験者で、2020 年度 4 月から本学大学院に入学することとなった留学生が 4 名おり、交換留学中の国際交流イベントや地域のお祭り、小中学校・高校での国際理解講座参加といった様々な経験を経て、福島や本学での学びに魅力を感じることができたことが、本学大学院入学のきっかけの一つとなっているようです。短期受入プログラムとして、Fukushima Ambassadors Program（8 月 19 日～31 日）、コロラド州立大学大学院生招聘事業（8 月 1 日～10 日）、世界展開力強化事業におけるトルコの大学生招聘（9 月 1 日～5 日）など、短期受入プログラムも充実したものとなりました。

(写真左)オランダ・ハンザ UAS フローニンゲン大学
クリスマス休暇前の特別授業
(写真右)スロベニア・リュブリャナ大学
フラットメイトとの休日

リフレクションにもとづく初年次学生の「学びの転換」促進支援事業

福島大学では、2019 年度入学生から「問題解決を基盤とした教育」をコンセプトとした新カリキュラムが編成されています。その中の特徴的な取組みとして、学生自身が学修経験や学修成果を蓄積していく「L ポートフォリオ」（ラーニング・ポートフォリオ）の導入があげられます。ラーニング・ポートフォリオの意義は、学生自身のリフレクションを大学４年間継続して展開することで、正課内外における学習効果が高まることにありますが、その円滑な実施に向けては、特に初年次学生へのフォローが重要となります。

「リフレクションにもとづく初年次学生の「学びの転換」促進支援事業」は、初年次学生に特化した支援策として、ラーニング・アドバイザー（LA：過年度学生による支援者）を組織し、先輩学生が、後輩（初年次）学生に対して、L ポートフォリオの使い方に関するサポートを行うという取組みです。今年度は、主に「L ポートフォリオ利用マニュアルの作成」と「L ポートフォリオ活用に向けた技術的講習会の企画」を行いました。

とりわけ、L ポートフォリオ利用マニュアルの作成過程で、学生たちは、L ポートフォリオの機能そのもののみならず、ラーニング・ポートフォリオや振返り（リフレクション）の意義、目標の立て方、効果的なプレゼンテーションの方法等について学ぶことができました。「他者へ伝える」という取組みを通じて、本事業に従事した学生自身の学びを深めることができました。

(写真左)利用マニュアルの作成
(写真中央)プレゼンの準備
(写真右)アイディアの共有

多文化体験による国際人育成プログラムの創出　～若者の消費行動を通して～

グローバルなテーマを設定し、世界各地域でテーマに関する調査やパフォーマンスを実施、その活動を通じて学生に多様な価値観に対する理解を深めてもらうことを目的とする私たちのプログラムも、おかげさまで 3 年目を終えることができました。今回のプログラムでは、経済経営学類の世界各地域に関わる授業において、受講生が対象地域に渡航し、そこで当該地域の若者の消費行動や日本のブランドイメージなどに関するアンケート調査を実施し、同時に現地の社会、文化を肌で感じ理解する活動を行いました。

韓国・大田では、フィールドワークを通して現地の金融事情や若者の消費意識について調査を行いました。

ロシア・ハバロフスクでは、現地の若者の消費行動を調査し、国立極東交通大学主催のイベントで日本の若者の興味関心と消費生活について紹介する活動を行いました。

中国・湛江市、深圳市では、オンラインとオフラインをシームレスに繋げた会員制スーパー等を視察し、若者のキャッシュレス事情調査を行いました。

マレーシアとブルネイでは、多文化社会における民族ごとの消費行動の違いについて調査しました。

そしてこれらの成果を、福島市内の「アオウゼ」において、市民向けイベント「ワールドマーケット at Fukudai ――「買いたい」を世界中で」として発表し、新聞各社に大きく取り上げていただきました。

アンケート内容の策定からイベント終了に至るまでの、学生達の多文化理解に関する成長ぶりはめざましいものでした。プログラム実施における多大なご支援に厚く感謝申し上げます。

韓国・テコンドー体験

ロシア・シカチアリャン村にて

中国・湛江特呈島でのボランティア
（マングローブ林の保全啓発活動）

「多様な学生が共に学ぶ大学」にむけた学生サポーターの養成

アクセシビリティ支援室は、様々な障がいや疾患のある学生が、障がいのない学生と同様に充実した大学生活を送れるよう、修学支援のための窓口として設置されました。障害のある学生への支援に加え、平成 29 年度からは障害学生を支援する「学生サポーター」を養成・派遣しています。

学生サポーターの活動として、ノートテイクの基本である手書きノートテイカーの養成を行いました。2 人組で役割を交代しながら、授業の内容だけでなく雰囲気も伝わるようにすること、正確さと速さのバランスなど、受講生それぞれが試行錯誤しながら練習していました。

また、今年度は新たに学習会も開催されました。サポーターにとってはそれぞれの専攻で学んだこと、専門知識を活かす機会となり、参加者にとっては自分の理解度を把握し、相手に説明する練習の場にもなりました。

冬期間は、例年通り雪かき協力隊の活動も行われました。今シーズンも降雪量がきわめて少なく、サポーターが活躍する機会も限られたものとなりましたが、多くの学生の登録がありました。今年度は雪が降る前の環境整備を強化したことで、移動に困難が生じやすい学生にとって、より構内の安全性を高めることができました。次年度も引き続き活動を継続してゆく予定です。

これらの活動を通して、障害のある・なしにかかわらず、様々な背景を持つ学生がお互いの理解を深め、共生社会の一員という意識を持つきっかけになることを期待しています。

【ﾉｰﾄﾃｲｶｰ（手書き）養成講座】

【総合防災訓練】

【雪かき協力隊による雪が降る前の環境整備】